

人間の強み

“集団は個人より賢い (Google 元 COE エリックシュミット)”

この節では、人間の生物としての強みについて考えてみましょう。「4次元世界（3次元空間と時間）において自己を客観視する機能」は、元々は他の生物同様、エネルギー源を獲得するための機能です。他の生物や他の人間との関係性を把握した上で現状分析を行い、それに基づいて自分の行動戦略や指針を構築できます。さらには、過去から学び、将来に向けた予測まで行うことができます。碁盤の上で自分の視野の範囲でしか行動戦略をたてられない動物一般と違い、碁盤を鳥瞰する視点でシミュレーションを行うことができます。これは、肥大化した前頭葉（脳）の働きによるものであり、優れたハードウェアと言えるでしょう。優れたハードウェアが、優れたシミュレーションを行うためには、その命令書に相当するソフトウェアが必要となります。そのソフトウェアを提供するのが人間の2つ目の機能である社会的遺伝子（ミーム）です。形式知（文字・映像・画像・データ）および暗黙知（文化・慣例）によって世代を超えて継承するあらゆる文明情報（技術・知識・芸術など）としての社会的遺伝子（ミーム）は、文字と言葉がなければ蓄積されなかったでしょう。文字や言葉は概念的には前頭葉（脳）で考え出されたものですが、手による文字の筆記がなければ文章は残せなかったし、声帯による会話が無ければ伝聞・伝承を残せなかったでしょう。人間にとっての翼は前頭葉ですが、同時に、道具としての手と声帯、も特筆すべきツールと言えます。道具としての手と声帯は、直立2足歩行によって可能となりました。なぜ人間が直立2足歩行することになったかは諸説あり、ここでは深入りしません。直立2足歩行によって、両手を自由に使えるようになりました。また、直立2足歩行により、食道が直角に折れ曲がって気道と合流し、口呼吸によって声帯を震わせ、言葉を操れるようになりました。この基本的なハードウェア（4次元客観視機能）とソフトウェア（社会的遺伝子）の組み合わせにより、人間は、もともと自らもその1構成要素であった自然から切り離された副産物として様々なハードウェアとソフトウェアを人工的に誕生させることを可能としたのです。その副産物の総称が文明です。人間は、肥大化した前頭葉（脳）、器用な両手、多様な音や声を生み出す声帯、という3つの身体的ツールを駆使して、文明という人工的副産物を生み出したと言えます。細胞分裂によって同じ生物学的遺伝子を持つクローンがいくらかでも生み出せるように、設計図・論文・マニュアルなどに格納された社会的遺伝子情報のコピーによって、衣服・住居・食料・社会インフラ・電気機器・乗り物などのハードウェア、および社会制度・慣習・文化などのソフトウェアのクローンがいくらかでも生み出せるようになりました。自然が、有性生殖（リモデリング）を介してその生物的遺伝子を変容させ、生物多様性を爆発的に増殖させたように、文明は、技術革新（イノベーション）や社会革命（レボリューション）を介してその社会的遺伝子を変容させ、人工的副産物の多様性を爆発的に増殖させたのです。

「4次元自己客観視機能」と「社会的遺伝子の伝承」という生物としての人間の強みに加え、その副産物としての文明の強みについても考えてみましょう。文明の強みの1つは、生物機能の補完・補強です。航空機は、鳥に優る翼を人間に与え、武器・兵器はトラに優る牙を与え、衣服は白熊の毛皮に優る暖を与えます。眼鏡・義足・ペースメーカーは、衰えた視力・脚力・心肺能力を補強します。薬・サプリメントは、体調不良と栄養不足を補います。文明の強みのもう1つは、時間的余剰および物質的余剰の提供です。交通・通信は、人間の移動・情報の移動速度を飛躍的に高め、膨大な時間的余剰を生み出しました。その結果、世界の実質的な時間距離は大幅に縮まりました。技術革新と大量生産によって生み出された多様で多量な物質的余剰は、本来生物がその活動時間のほとんどを費やさねばならなかったエネルギー源獲得のための、生きるか死ぬかのサバイバルゲーム、から人間を解放し（注1）、やはり大幅な時間的余剰を生み出しました。人間が手にしたこの膨大な余剰時間は、文明の中で一体何に使われているので

しょうか。文明の3つめの強みは、社会の形成です。アリ地獄はアリの天敵です。一匹のアリがアリ地獄の巣に落ちてしまえばあっという間に食べられてしまいますが、多量のアリが一度に巣に落ちると、アリ地獄は逆にアリの集団に殺されてしまいます。このように生物界においても、集団の力は、個対個の力関係を容易に逆転させてしまうのです。ましてや、人間には4次元客観視機能があります。その帰結として、人間がチームを組んでプロジェクトを行う「協働」という戦略が生み出されました。碁盤を上から俯瞰していれば、自分の黒い駒だけでなく、周りの白い駒と一致団結して協力することにより、より高い成功率でプロジェクトを遂行できると考えるのは当然でしょう。その結果、協働する人間が、社会的遺伝子としてのソフトウェア（制度・慣習・文化・価値観）を構築・共有し、社会が形成されました。大柄で力の強かった類人猿のネアンデルタール人が絶滅し、我々人類が生き残ったのは、この「協働」という点で我々が優っていたからだという説もあります。

（注1）未だ途上国の一部や紛争域で食料が不足する事態はありますが、人間総体としては食糧問題を克服しつつあると言って良いでしょう（ハンス・ロスリング^[1]）。経済破たんによる自殺などは、エネルギー源の獲得の失敗ではなく、資本主義経済システムという文明の制度欠陥と考えたほうが良いでしょう。ほとんどの先進国では、社会保障制度などにより、いわゆる食べるだけであれば、最低限の生活保障がされているはずで

参考文献

[1] ハンス・ロスリング著、上杉周作・関美和訳、ファクトフルネス、日経 BP